

皇城火災以前の「公文録」の性格について

水上 たかね

——「辛未七月兵部省伺」所収「軍医寮設立伺」(副本)の検討から——

はじめに

(一) 本稿の目的

明治四年(一八七二)七月五日、明治政府において軍事を管掌する官庁であった兵部省の中に、新たに「軍医寮」という組織が設けられた。軍医寮の設置は、「わが国の医療行政制度史においては、以後軍関係の医事の監督庁が大学(のちに文部省)ないし内務省ではなく、兵部省(のちに陸、海軍省)に定まり、軍用医事と一般の医事が行政上区分されることとなる画期的な措置であった」とされる。⁽¹⁾「公文録」に含まれる「軍医寮設立伺」⁽²⁾は、兵部省の上申書を中心に、それに対する意見を求められた大学・東校の答申書など、軍医寮設置に関わる諸文書がまとめられた一件史料である。

「公文録」とは、「太政官が授受した各省院使府県の稟請および上申進達などをことごとく収録し、これを各官庁別に分け、年月別順に編

輯したもの」を基本とする文書群であり、現在(3)は国立公文書館に所蔵されている。原則として正本には文書の原本、副本にはその写しが収められているが、明治六年五月五日の皇城火災によって太政官の文書が焼失したために、火災以前の時期の「公文録」には原本が編綴されていない。先述の「軍医寮設立伺」も同様である。当該期の「公文録」の編纂過程については中野目徹氏の分析があり、⁽⁴⁾「正本よりも副本の方が原本に近いテキストになっている」ことが指摘されている。史料状況が決して良いとは言えない明治政府最初期の研究にとって、「公文録」の副本は失われてしまった一次史料に迫り得る貴重な史料と考えられるが、管見の限り未だ十分に活用されていない。また、中野目氏は火災以前の「公文録副本」に関して、今日に伝来する各省使府県の文書や個人関係文書の中に見られる文書との比較によって、その性格を一層明確にすることを今後の課題として挙げている。幸いに兵部省の史料は、同省から明治五年二月二十八日に分離した陸軍省・海軍省への引き継ぎ、敗戦後の米国による押収・返還を経て、現在は

防衛省防衛研究所に所蔵されており、「公文録」収録史料と対照可能な兵部省当時の一次史料がわずかながら残されている。

そこで本稿は、「軍医寮設立伺」を中心に「公文録」の「兵部省伺」と題される簿冊群、とりわけその副本に対して史料学的な分析を加えることにより、皇城火災以前の時期の「公文録」の性格に対する理解をより一層深めることを目指す。

(二) 皇城火災以前の時期の「公文録」の編纂方法と副本

本論に入る前に、皇城火災以前の時期の「公文録」の編纂方法および副本との関係について、中野目徹氏⁽⁵⁾によって明らかにされたことをまとめておきたい。

明治六年五月五日の未明、皇城（旧江戸城）において火災が発生し、太政官・宮内省の公文書類の「過半」が焼失した。ただし、救出された「燼余」の文書も相当数存在したようである。翌六日、太政官の「閣議」において、諸省・府県および太政官内の各部局に対して、それぞれが設置されて以来作成した文書を前身の組織から引き継いだ簿冊まで含めて謄写・提出することを命じる達が決定され、翌々八日に「施行」された。諸省宛ての達は、太政官制改革後である明治四年八月以降の分をなるべく早く提出するよう求め、明治六年一月以降の分については、太政官の記録課の官員が出向いて写し取ることを通達している。火災から約半年で取り急ぎ必要とする時期の書類の謄写物はほぼ収集されたとみられ、これらを元に記録課では、「公文録」（および「太政類典」）の編纂が本格的に開始されることになった。

火災以前の記録の復元は、燃え残った文書と各省等に提出させた謄写物を材料として進められた。編纂者については、「公文録」の各簿

冊の巻首に編綴されている件名目次の野紙一行目に、「整頓」者として書かれている者が、その簿冊の編纂責任者である。簿冊の巻末に校訂者と謄写者が記載されている場合もある。編纂責任者は上位の属官（判任官）、校訂者は下位の属官、謄写者は雇の写生字であり、火災前の時期の「公文録」の「整頓」者は、宮崎幸磨・伊藤修・植松有経・中沢重信・大坪格・太田正隆の六名のみであるという。

「公文録」の正本には太政官か太政官記録課の野紙が使用されているのに対し、副本の中には各省や府県の銘のある野紙が使用されているものが頻繁に見られる。すなわち、副本の中には各省等に提出させた謄写物が編綴されている簿冊がある。また、副本には、天皇による裁可を示す「検」印やその他の印判がある文書、あるいは焼け焦げた跡がある文書が含まれている場合もあり、それらは火災で燃え残った書類とみられる。副本であっても正本と同様に編纂物が編綴されている簿冊も多くあり、これらは燃え残った書類の損壊が激しく編綴に耐えなかったか、謄写の状態が悪く、そのままでは編綴できないと判断されたものと推測されるという。

結論として中野目氏は、「原本が焼失してしまった火災以前の「公文録」については、「燼余」の書類および各省使・府県等から提出させた謄写書類によって副本が編纂され、それを複写した正本が作成された。したがって、正本よりも副本の方が原本に近いテキストになっている⁽⁶⁾」と述べている。

一 「軍医寮設立伺」の構成

本節では、「軍医寮設立伺」（副本⁽⁷⁾）の構成を確認するが、その前に

史料中に登場する明治政府の機関について簡単に述べておきたい。

まず兵部省は、明治二年七月八日の「職員令」に基づく官制改正により、軍務官にかわって設けられた機関である。「海陸軍・郷兵・招募・守衛・軍備・兵学校等事」の「総判」を掌る卿を長として、大輔・少輔、大丞以下の官員が置かれ、省中には兵学寮・武庫司・会計司・糺問司が設けられた。本省は東京に置かれたが、明治二年十一月に死去した兵部大輔大村益次郎の遺策として、大阪が陸軍建設の拠点となっており、同所には兵部省の出張所が置かれていた。「軍医寮設立伺」には「軍事病院」なるものが登場するが、これは明治三年二月に兵部省が開設した大阪軍事病院と考えられる。大阪軍事病院には医学校が併設され、蘭医のボードインや中典医の緒方惟準⁽⁸⁾らを中心に診療・軍医教育が行なわれていた。兵部省は明治五年二月二十七日に廃止され、翌日陸軍省と海軍省が設けられることになる。

次に大学および大学東校について述べると、明治元年中に新政府は、旧幕府の昌平坂学問所・医学所・開成所を接収して、それぞれ昌平学校・医学校・開成学校とし、翌二年六月には、昌平学校を中心に三校を合わせて大学校とした。大学校は同年七月八日の「職員令」において、別当以下の官員を置くことが規定され、このとき大博士、少博士、大助教といった教官も置かれている。同年十二月十七日、大学校を大学と改め、医学校を大学東校、開成学校を大学南校と改称した。明治四年七月十八日の文部省設置に伴って大学は廃止され、大学東校・大学南校はそれぞれ東校・南校に改称される。

最後に弁官については、太政官において文書の受付・伝達を担った部局である。

【表1】「軍医寮設立伺」(副本)の構成

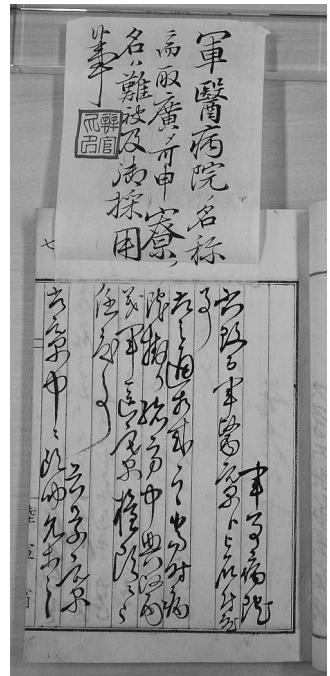
- ① 庚午七月十八日 兵部省→弁官 《陸軍省十行罫紙》
- ② ①の別紙 《陸軍省八行罫紙》
- ③ 庚午八月三日 兵部省→弁官 《陸軍省八行罫紙》
- ④ 庚午十月 兵部省→弁官 《陸軍省十行罫紙》
- ⑤ 庚午閏十月四日 大学東校→弁官 《文部省十行罫紙》
- ⑥ 庚午閏十月九日 兵部省→弁官 《陸軍省十行罫紙》
- ⑦ 辛未正月二十七日 兵部省→弁官 《陸軍省十行罫紙》
- ⑧ 辛未五月九日 兵部省→弁官 《陸軍省十行罫紙》
- ⑨ 未五月端午 松本良順「兵部病院医学寮建議」
《陸軍省八行罫紙小／無銘十行罫紙小／無地紙大》
- ⑩ 辛未五月十日 弁官→大学 《文部省十行罫紙》
- ⑪ 辛未五月十二日 大学→弁官 《文部省十行罫紙》
- ⑫ 辛未七月(五日) 太政官→兵部省 《陸軍省十行罫紙》
- ⑬ (明治四年)七月五日 弁官→大学 《文部省十行罫紙》
- ⑭ 辛未七月(五日) 太政官布告 《太政官十行罫紙》

※庚午=明治三年／辛未=明治四年

それでは、「軍医寮設立伺」(副本)の構成を見ていこう(表1参照)。各文書の番号(丸数字)は、収録順に筆者が付したものであり、以下本稿中の丸数字はいずれもこの史料番号に対応している。

①は、庚午(明治三年)七月十八日付で兵部省が弁官に宛てた上申書であり、陸軍省十行罫紙に記されている。内容は、「軍事病院」を「軍医寮」と改め、病院掛の緒方(惟準)宮内中典医を軍医寮権頭に任じること、また、兵学寮の教官の官名を別紙(史料②)の通りに定めることを求めたものである。罫紙の右半面(オモテ面)の上部には、「軍医病院ノ名称ニ而取広メ可申、寮ノ名ハ難被及御採用候事」という指令を記した紙片(付紙)が貼り付けられている(写真1⁽⁹⁾)。

【写真1】「軍医寮設立伺」
(副本) ①の付紙



②は、陸軍省八行野紙を用いて、兵学寮官員・教官の官名・官位を表に示したものであり、①の「別紙」とみられる。

③は、庚午（明治三年）八月三日付で兵部省が弁官に宛てた上申書であり、陸軍省八行野紙に記されている。内容は、兵部省の軍医寮設置願いに對し、前日（昨日）に土方（久元）中弁・江藤（新平）中弁から河村（純義）兵部大丞へ、軍医寮を設置せずとも「大病院」からしかるべき人物が「軍事病院」に出仕すればよい旨の「示談」があったことを受けて、当面はその通りでよいとし、石井（信義）大学少博士・池田（秀之、謙齋）大学大助教・竹内（正信）大学大助教に「当官ヲ以テ軍医病院へ出仕」を命ぜられたく、ついでには早速兵部省大阪出張所へ向うよう達することを求めたものである。指令は記されていない。

④は、庚午（明治三年）十月付で兵部省が弁官に宛てた上申書であり、陸軍省十行野紙に記されている。内容は、軍医寮に関する「申立」に對する付紙での却下を受けて、改めて軍医寮の設置と大学「南校」（東校の誤り）より島村（鼎、鼎甫）大学少博士・坪井（為春）大学少博士・竹内（正信）大学大助教の「転勤」を要請し、島村・坪

井は軍医助、竹内は軍医権助に任ぜられるよう求めたものである。軍医寮や軍事病院の「趣意」が理解されていないという判断から、戦時でなくとも「兵隊入寮」の際には身体検査を行なうものであるということを説明している。指令は記されていない。

⑤は、庚午（明治三年）閏十月四日付で大学東校が弁官に宛てた上申書であり、これは文部省十行野紙に記されている。内容は、兵部省の軍医寮設置伺い（④）を受けて、軍医寮設置には賛成するが、「医員撰挙」は東校に委任されること、坪井少博士ほか二名の転任は免ぜられること、人選は兵部省から東校へ相談の上で取り計らうよう命ぜられることを求めたものである。

⑥は、庚午（明治三年）閏十月九日付で兵部省が弁官に宛てた上申書であり、陸軍省十行野紙に記されている。軍医寮設置の許可を催促する内容であり、④に對する指令が無かったことから出されたものと考えられる。

⑦は、辛未（明治四年）正月二十七日付で兵部省が弁官に宛てた上申書であり、陸軍省十行野紙に記されている。内容は、軍医寮設置願いに對する「軍医病院之名称ニ而取広メ可申段、御附紙御沙汰」を受けて、兵士の入寮・入隊の際に身体検査を軍医寮において行なうこと、「軍医之規則・医員等級名称」を確立しなければ「医員之褒貶」も難しいこと、当三月あるいは四月には大阪陸軍所に二千人程の兵卒が入隊予定であること、という理由をもって、改めて軍医寮の設置を求め、同時に緒方（惟準）宮内中典医を軍医寮頭に任じることを求めたものである。兵部省大阪出張所から「毎々催促」を受けているとして、至急の指令を要請している。ただし、指令は記されていない。

⑧は、辛未（明治四年）五月九日付で兵部省が弁官に宛てた、「別

帖松本良順軍医寮建設之見込」(史料⑨)の添え状であり、陸軍省十行野紙に記されている。

⑨は、「未五月端午」(明治四年五月五日)付で松本良順(大学出仕・兵部省病院御用掛兼勤)が作成した「兵部病院医学寮建議」である。用紙は、本文には他よりも小さいサイズの陸軍省八行野紙が用いられ、添付資料とみられる部分には、同じく他よりも小さいサイズの無銘十行野紙と大判の無地紙が使用されている。内容は、「軍局ニ属スル医官」の職掌・組織方法、「軍局病院」および「医学校」の設立・運営方法について述べたものである。

⑩は、辛未(明治四年)五月十日付で弁官が大学に宛てた下問書であり、文部省十行野紙に記されている。内容は、兵部省の「申立」(⑧⑨)に対する考えを問うたものである。

⑪は、辛未(明治四年)五月十二日付で大学が弁官に宛てたものであり、文部省十行野紙に記されている。これは、軍医寮設置に関する「松本良順建白書」(⑨)についての下問(⑩)に対する返答書であり、「官費ヲ以テ建ル医学校ハ全ク海陸軍ノ医官ヲ教育スル為ナルカ故ニ」東校を廃止して「軍医学寮」を設けることや、「兵部中ノ医局ヲ以テ天下ノ医事ヲ統括スル」ことに反対し、「政府ノ医局ヲ以テ兵部ノ医局モ当時之ヲ管スル」ことを主張している。

⑫は、辛未(明治四年)七月付で太政官が兵部省に対し、省中に軍医寮を設置することを達したものである。冒頭に「七月五日」という記載があり、用紙は陸軍省十行野紙である。

⑬は、兵部省中に軍医寮が設置され、「別紙之通同省〔兵部省〕へ御達」があった旨を、「七月五日」付で弁官が大学に通知したものであり、文部省十行野紙に記されている。

最後に⑭は、兵部省中に軍医寮を設置することを示した、辛未(明治四年)七月付の太政官布告であり、冒頭には「七月五日公布」と朱書されている。「軍医寮設立伺」(副本)の中では、この文書のみ太政官十行野紙に記されている。

以上が「軍医寮設立伺」(副本)の構成である。上申に至る経緯に関する記述に注目すると、前後の文書が直接的には繋がっていない場合もあることから、各文書間にはここには残されていない文書や、文書には残らないやり取りすらあった可能性を、常に念頭に置く必要がある。一方、正本については、副本との間で基本的な文書構成に差異は認められない。ただし、助詞・送り仮名・關字等の表記の違いや誤写はあり、さらに、修正の跡や付箋、差出・宛先・日付の表記方法等、清書に際して省略されたり整えられたりしている部分もある。

二 「軍医寮設立伺」および「兵部省伺」副本の検討

「軍医寮設立伺」は、「公文録」の「兵部省伺」と題される(表紙には「兵部省之部」と記される)簿冊群のうち、辛未(明治四年)七月の簿冊に収録されている。そして、「軍医寮設立伺」にまとめられた文書は、皇城火災後に至急の提出が求められた明治四年八月以降の分ではなく、全て明治四年七月以前の時期のものである。以下、その他の「兵部省伺」収録文書にも言及しながら、史料の性格を検討したい。

(一) 副本の特徴

「軍医寮設立伺」(副本)の用紙は、陸軍省野紙・文部省野紙・太政官野紙・無銘野紙・無地紙で構成されている。簿冊の名称は「兵部省

伺」であるが、全てが陸軍省から提出された謄写書類ではなく、大学関係の書類については後身である文部省から提出された謄写書類が編綴されている。「公文録」の「兵部省伺」全体について見ると、副本には太政官野紙や陸軍省野紙・海軍省野紙に加えて、大蔵省ほかの各省や弾正台、開拓使、東京府ほかの各府県の野紙が含まれている。ごく稀に兵部省野紙も見られるが、燃え残った文書か否かは不明である。各機関の野紙は八行のものと十行のものが交じっている。八行野紙から十行野紙に改定されたのが明治六年六月十日、十三行野紙に改定されたのが明治八年四月八日であるが、いずれの際も使い残した従来の野紙は「取交セ相用ヒ不苦」とされた^⑩。余った野紙が提出用に使われた可能性は高いため、野紙の行数から謄写時期を判断することは難しい。

用紙の種類は簿冊によって傾向が異なっており、明治二年中の簿冊（七月～十月と十一月～十二月の二冊）には陸軍省・海軍省いずれの野紙も含まれず、大蔵省等の野紙は含まれているが、大半が太政官十行野紙である。この時期については、「京都兵部省伺」（明治二年七月～十二月の一冊）という簿冊もあるが、これについては全て太政官十行野紙で構成されている。また、明治四年十月以降の簿冊（明治四年は十月～十一月と十二月の二冊、明治五年は正月と二月の二冊）に収録された文書はほぼ清書されたものであり、添付資料の図表や冊子を除けば、明治四年の二冊は全て太政官十行野紙、明治五年の二冊は明治四年七月以前の文書（太政官十行野紙）を除いて全て太政官記録課十行野紙である。したがって、「軍医寮設立伺」（副本）と類似の特徴を持つ史料を含む「兵部省伺」の副本は、明治三年正月から明治四年九月までの計十六冊となる。

「軍医寮設立伺」が含まれる辛未（明治四年）七月の簿冊の編纂者は、責任者が少主記中沢重信、校訂者が十三等出仕巖本範治、謄写者が写字生松本高明である。「公文録」の「兵部省伺」は、「整頓」者の記載が無い明治四年正月と同年八月以降の簿冊を除くと、全て中沢が編纂責任者（「整頓」）になっている。中沢の肩書は、明治二年の簿冊は「権中主記」、明治三年以降の簿冊は「少主記」となっており、明治二年の分が後から編纂されたことが窺える。一方、校訂者と謄写者は簿冊によって異なっている。

⑤明治三年閏十月四日の大学東校上申書の最後には、「右御下問闕」と墨書された貼紙がある。正本にはこの文字しか書き写されていないが、副本の貼紙の下には朱書で「兵部省伺書欠」という記載があったようで、透かし見ることができ。これは、文部省においてあるいは編纂の初期の段階で、⑤の文中に登場する「兵部省ヨリ伺出」が見当たらなかったため、朱書で「兵部省伺書欠」と記したが、編纂の過程で陸軍省から提出された④と組み合わせることができたため、編纂者が貼紙で「右御下問闕」に修正したのではないかと思われる。

このように、編纂者や提出元の各省使府県の補足説明が、紙で貼り付けられていたり直接書き込まれていたりする例は多い。それらのほとんどは無記名で日付の記載も無いが、「兵部省伺」副本の辛未（明治四年）五月の簿冊中には、「御達見本御指令不見旨陸軍省申出 七年五月廿八日誌^⑪（中沢重信）」という、（明治）七年五月二十八日の日付と編纂責任者中沢重信の朱印を持つ貼紙があり、^⑪編纂はこの頃に行なわれたことが窺える。

⑨の松本良順の建議は、野紙が他と比べて小さく、⑩との間には裏表紙と思われる同じサイズの無記載の陸軍省野紙が入っており、図表

も付されている。また、「軍医寮設立伺」中の他の文書と異なり、この建議には朱筆が多く入れられている。加筆の形ではなく文章の途中から朱書きになっている部分もあり、これは元の史料に施されていた修正を朱書の形で反映させたものかもしれない。陸軍省野紙が使用されているため、兵部省時代の原本ではなく陸軍省時代の謄写物であるが、極力元の体裁や文書としてのまとまりを残そうとしたものとみられる。ただし、日付と署名（「未五月初午 松本良順」）がやや不自然な位置にあるため、乱丁の可能性がある。

（二）未収録文書について

前節で述べたように「軍医寮設立伺」においては、必ずしも前後の文書が直接的には繋がっていないために、同史料からはその間の事情が不明な場合も少なくない。

例えば松本良順の建議（⑨）は、その添え状（⑧）によると、「為御参考差出申候」、つまり参考資料として提出されているが、直前の⑦の上申書からは三ヶ月以上も経っており、これだけではやや唐突な印象を受ける。実は、陸軍軍医団が編纂した『陸軍衛生制度史』には、同じ日付で兵部省が弁官に宛てた軍医寮設置を求める上申書が掲載されている。凡例の記述から、この上申書の出所は「陸軍省医務局保存ノ記録」であった可能性が高い⁽¹²⁾。兵部省は軍医寮の設置を重ねて求めたこの上申書の参考資料として、松本良順の建議（⑨）を弁官に提出したが、何らかの事情で参考資料だけが「軍医寮設立伺」に収録される結果になったと考えられる。

また、明治三年八月三日の弁官宛て兵部省上申書（③）では、中弁からの「示談」を受けて、石井大学少博士・池田大学大助教・竹内大

学大助教の「当官ヲ以テ軍医病院へ出仕」を求めている。ところが、続けて収録されている明治三年十月の弁官宛て兵部省上申書（④）では、軍医寮に関する「申立」に対する付紙での却下を受けて、改めて軍医寮の設置と大学東校より島村大学少博士・坪井大学少博士・竹内大学大助教の「転勤」を要請している。すなわち、医員について、八月三日の段階では、さしあたり大学東校に所属したままでの大阪軍事病院出仕（兼勤）を求めるにとどまっていたが、十月になると、軍医寮の設置と同寮への医員の転属を要求するようになっており、その対象となる人物にも変更が加えられている。

軍医寮に関する「申立」が付紙で却下されたという点については未詳であるが、兵部省の医員派遣要請に対して、「大学（もしくは大学東校）」はこの人事を容易に承服しなかったらしく、「大学がその申出をなかなか受け入れなかったことは兵部省の態度を硬化させ」たとの指摘がある⁽¹³⁾。この間の明治三年十月二日に兵部省は弁官に対し、石井少博士と竹内大助教に「本官ヲ以テ大坂軍事病院出仕」を命じるよう求めたが、翌々四日に弁官は、石井少博士は大学の「申立」により既に「大坂理化学所出張」が命ぜられているため、他の者を選ぶよう兵部省に返答した⁽¹⁴⁾。石井少博士の代わりか否かは不明であるが、兵部省は同日弁官に対し、島村少博士に「以本官大坂軍事病院出仕」を命じるよう求めている⁽¹⁵⁾。これらの文書はいずれも「公文録」に収められており、副本の用紙は全て陸軍省十行野紙であるため、同省から提出された謄写書類とみられる。ところが、史料③や④と関係の深い文書であるにもかかわらず、「軍医寮設立伺」とは別の一件として、「兵部省伺」の庚午（明治三年）十月～閏十月の簿冊に二号にわたって収められている。「兵部省伺」の中に、文部省など他機関の謄写書類が含ま

れていることから、「公文録」の各一件史料のまとまりは、提出元の各機関の文書保存状況を土台としつつ、記録課での編纂作業によって再構成された部分が多いのではないかと思われる。

三 防衛省防衛研究所所蔵史料との対照

―指令付札をめぐって

明治三年七月十八日の兵部省上申⁽¹⁾に対する指令は、「公文録」の正本では上申書の最後に朱筆で書き込まれているが、副本では指令を記した紙が上申書の上部に貼り付けられている（付紙）。さらにこの付紙には、「弁官印」と篆刻された方印が朱で書き写されている（写真1）。「公文録」の「兵部省伺」に収録された伺い↓指令の形をとる文書に関しては、副本の場合であっても、指令は上申書の最後に文面が朱筆で書き込まれるか、その横に「付紙」などと注記されているだけのものが多い。しかし稀に、印や付箋の跡まで写し取られたものや、史料①のように実際に付箋を貼ることで、その形態が復元されたものが見られる。「兵部省伺」から三例挙げよう（写真2）。

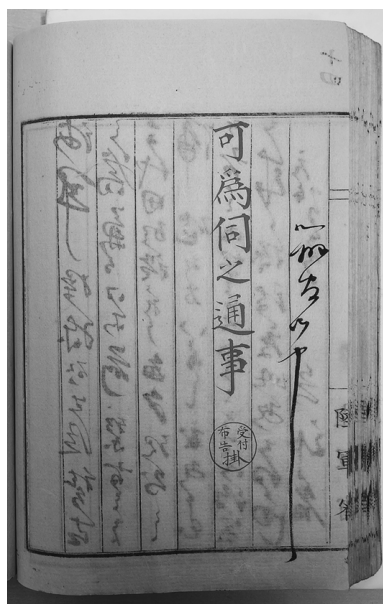
〈例1〉は、⁽¹⁷⁾庚午（明治三年）四月二十四日付で兵部省が弁官に宛てた上申書である。本文は、「海軍操練所生徒稽古之為、兼而同所前ニ繋有之候千代田形艦ニ於テ、毎夕規則之号砲打方いたし度段申出候、右者御差支無之候ハ、御許容相成候様致度、此段相伺候也」と墨書されている。上申書の最後には、「可為何之通事」という指令が朱書されており、その下には、「受付布告掛」の丸印が同じく朱筆で書き写されている。内容は海軍関係であるが、陸軍省八行野紙に記されており、同省から提出された謄写書類とみられる。

〈例2〉は、⁽¹⁸⁾庚午（明治三年）六月付で兵部省が弁官に宛てた上申書である。用紙は陸軍省十行野紙であり、本文は「第四大隊二番小隊兵卒八三郎義、別紙口書之通罪状有之二付、以軍律被処死刑度、此段奉伺候也」と墨書されている。〈例1〉と同じく最後に指令が朱書されているが、記載方法は少し異なる。「伺之通」という文言は墨書の枠で囲まれ、その下部に「受付掛」の丸印が朱筆で書き写され、さらに枠囲みの右肩には「右附紙」と朱書されている。元の史料では指令が付紙に記され、その付紙には「受付掛」の割印が据えられていたことが分かる。

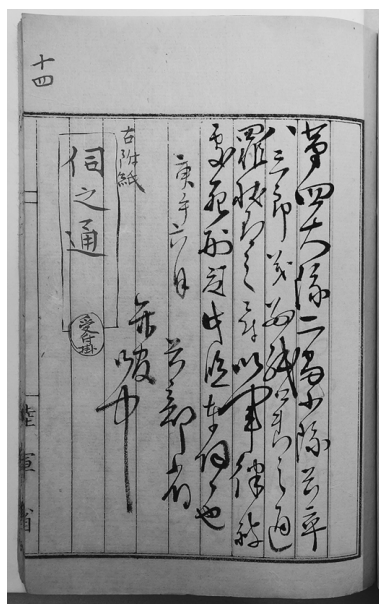
〈例3〉は、⁽¹⁹⁾辛未（明治四年）正月二十日付で東京府が弁官に宛てた上申書である。内容は省略するが、本文は墨書されており、指令は「伺之通」と墨書された付紙が、本紙の上部に貼り付けられている。さらに、本紙と付紙の間で割印になる形で「弁官之印」という方印が朱筆で書き写されている。この文書は東京府十行野紙に記されており、同府から提出された謄写書類と考えられる。上申書の作成者も東京府であり、兵部省の上申書以外でも史料①のような指令の様式が確認できることになる。

ここで、防衛省防衛研究所に所蔵されている「御指令済書類」という史料を取り上げたい。表紙に「陸軍記室」という四角形の朱印が押されていることから、これは陸軍省旧蔵史料と考えられる。明治三年と明治四年の簿冊が一冊ずつ残されており、両者の基本的な性格は同じようである。ただし、明治四年は文書の様式の変化が激しい。後の議論との関係から、以下では明治三年の簿冊について詳述する（表2⁽²⁰⁾参照）。収録されている文書は兵部省時代の一次史料とみられ、兵部省八行野紙を用い、かつ指令が記された付紙（指令付札）を持つ

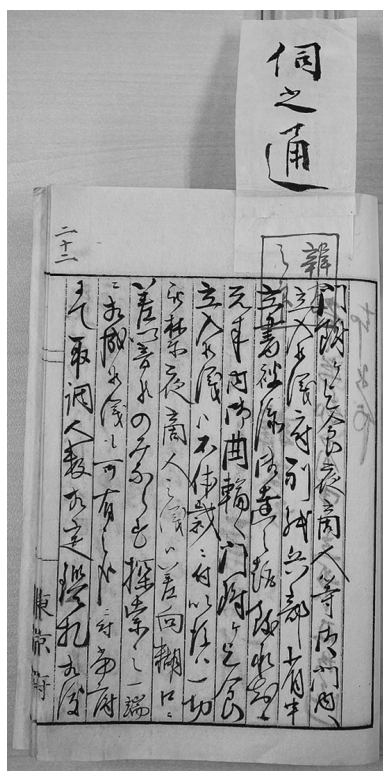
【写真2】「兵部省伺」副本来収録されている指令の形態が示された文書



〈例1〉



〈例2〉



〈例3〉

【表2】「御指令済書類」(明治三年)収録文書

	作成日	作成者→宛先	用紙	付札指令	付札の印
1	3月19日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通事」	受付布告掛
2	3月27日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「奏任出仕ニ候事」	—
3	—	—	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
4	4月8日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「父母之忌五十日中ト雖、役柄ニ依リ除服被仰付輩モ可有之、其余ハ供奉不相成候事」	受付布告掛 カ (かすれ)
	4月9日	弁官→兵部省	太政官八行罫紙	—	—
5	4月8日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付布告掛
6	4月10日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通」	受付布告掛
7	4月10日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	—	(本紙に割印の跡「掛」)
8	—	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通、地図者留置候」	受付布告掛
9	4月13日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通事」	受付布告掛
10	—	—	無地紙	「可為何之通」	受付布告掛
11	4月 (追而書の後に異筆で4月4日と記す)	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	①「一昨年楠社造営被仰出、追々名和・菊池等祭典モ可被為挙行儀ニ付、招魂社へ配祀之儀者不被及御沙汰候、尤癸丑以来王事ニ斃候者等ハ御取調中ニ付、追テ御沙汰可有之事」 ②「華族百官神葬地所神祇官へ御渡相成居候間、招魂社内へ埋葬且小社取建之儀、不被及御沙汰候事」	①受付布告掛 ②受付布告掛 カ (かすれ)
12	4月19日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通事」	受付布告掛
13	庚午4月24日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通事」	受付布告掛
14	—	—	無地紙	—	—
15	4月	兵部省	兵部省八行罫紙	「御附紙 可為何之通」(付札無し)	—
16	庚午4月	兵部省	兵部省八行罫紙	「御附紙 可為何之通」(付札無し)	—
17	庚午4月27日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
18	4月	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙 (別紙は無地紙)	「伺之通」(別紙に付札)	受付布告掛
19	庚午4月29日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「除隊之兵員、於其省当人江直帰籍印鑑相渡、其旨管轄之府藩県庁江可相達事」	受付布告掛
20	庚午5月8日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「御場所御手薄ニ付番兵是迄之通差置候事」	受付掛
21	庚午5月22日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「増上寺之儀、是迄通之体裁ニ候ハ、差間無之候、上野之義者外御都合も有之候ニ付、自余之地相撰可伺出候事」	受付掛

←〈例1〉

22	庚午 5 月 25 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「刑部省へ者先達中御達相成、東京府へハ今般相達置候事」	受付掛
23	庚午 5 月 17 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「大手下明屋敷在来之建物修繕而已之様兼而申出ニ付、其旨土木司江相達置候処、今般申出之趣ニテハ全新規取建候ヶ所モ不少様相見候ニ付、委細図面ヲ以新規取建之廉者更ニ伺出可申事」	受付掛
24	庚午 5 月	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「総而伺之通下賜候事」	—
25	庚午 5 月 23 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	①「追テ何分御沙汰可有之事」 ②「当分之處先可為是迄之通事」 ③「時々相場ヲ以相渡シ候事」	①受付掛 ②受付掛 ③受付掛
26	庚午 6 月 3 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通申付又ハ差免候事ト相認候事」	—
27	庚午 6 月 14 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通東京府へ相達置候間、同府打合可取計候事」	受付掛
28	庚午 6 月 14 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通、但不都合之次第柄可申出事」	—
29	庚午 6 月	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
30	庚午 6 月 17 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「喇叭稽古差免候而不苦候事」	受付掛
31	庚午 6 月	若松県→弁官 伝達所	太政官八行罫紙	「附紙 伺之趣兵部省へ相達置候事」（付札無し）	—
32	庚午 6 月 25 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之趣難相成候事」	受付掛
33	庚午 6 月 22 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「御門鑑札同様処置可致事」	—
34	庚午 6 月 29 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
35	庚午 5 月 23 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可処斬罪事」	受付掛
36	明治 3 庚午歳 6 月 22 日	国蔵→糺問司 (上の関連書類)	糺問司八行罫紙	—	—
37	庚午 6 月 28 日 (別紙は庚午 6 月)	兵部省→弁官 (別紙は按察府→兵部省)	兵部省八行罫紙 (別紙は按察府八行罫紙)	「伺之通取計候様角田県江被仰付候間、此段相達候事」	受付掛
38	庚午 7 月 5 日 (別紙は庚午 6 月)	兵部省→弁官 (別紙は正親町陸軍少将ほか 9 名より)	兵部省八行罫紙 (別紙も同じ)	「追而何分之御沙汰可有之事」	受付掛
39	庚午 7 月 4 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「献言等之儀者格別之事ニ候得共、鉄道之儀ニ付再議之次第も有之云々申立候儀如何之事ニ候、兼而御決定之儀候間、富士艦宿陣所之儀ハ早々東京府へ可引渡、尤代地入用候ハ、土地相撰可申出事」	受付掛
40	庚午 7 月 9 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	受付掛

←〈例2〉

41	庚午 7 月 8 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通事」	受付掛
42	庚午 7 月10日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之趣ヲ以テ御褒詞并羽重壹 疋被下候間、大藏省へ受取、於 其省可取計事」	受付掛（付 札に完全な 印、罫紙上 部の割印跡 と矛盾）
43	庚午 7 月13日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通可申付事」	受付掛
44	庚午 7 月17日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之趣外務省へ相達置候間、 同省江引合可有之事」	受付掛
45	庚午 7 月17日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「慰労金被下候儀ハ不被及御沙 汰候、破損所取繕遣シ候カ又ハ 営繕料相渡候様、於其省可取計 事」	受付掛
46	庚午 7 月18日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
47	庚午 7 月	太政官→兵部 省 (規則書)	兵部省八行罫紙	①「下ヶ札可為何之通事」 ②「本条軍艦云々出帆之節差止 候儀ハ地方官之任ニ有之、既 ニ其旨相達置候、兵威云々之 処置ハ地方官ヨリ報知之上取 計候儀ニ候事」 (①②ともに下げ札に対する指 令)	①受付掛 ②受付掛
48	庚午 8 月 2 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之趣、追而御定格相立候迄 ハ、先ツ可為是迄之通事」	受付掛
49	庚午 8 月 2 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
50	庚午 8 月24日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「申出之通於其省可取計事」	受付掛
51	庚午 8 月 5 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「不被及御沙汰候事」	受付掛
52	庚午 8 月 5 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
53	庚午 8 月 6 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「三職ヨリ艦長以上懇諭之儀ハ 可為何之通事」	受付掛
54	庚午 8 月 7 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
55	庚午 8 月10日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
56	庚午 9 月 2 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「別紙大藏省見込之通ニ候事」	受付掛
57	庚午 9 月14日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為何之通事」	受付掛
58	—	— (規則書 「諸御門警戒 兵規律」)	兵部省八行罫紙	①「伺之通」 ②「伺之通」 ③「伺之通」 ④「伺之通、但自今非常出火之 節ハ不及下座候事」 ⑤「以下四点共伺之通」 ⑥「大手御門坂下御門内之諸番 所ハ下座規則是迄之通たるへ く、其余外桜田見付始諸見附 ハ親王大臣伯大納言可致下座 事、但下座之式、下座敷江下 り候迄ニ而、平伏ニ者不及候 事」	①受付布告 掛カ ②受付布告 掛 ③受付布告 掛 ④受付布告 掛 ⑤受付布告 掛カ ⑥受付布告 掛 (かすれ)

59	庚午 8 月 25 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
60	庚午 9 月 27 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「非常平常関門於て難見分、其省儀ハ特例ヲ以テ省印ニテ通行相成候事ニ付、可為従前之通、名前理之儀ハ他江響合候間不相成候事」	—
61	庚午 9 月 28 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「転任之儀昨日相達置候事」	—
62	(明治 2 年カ) 10 月 28 日	兵部省丞→弁官	無地継紙	「兵制之儀篤与御取調之上一定ニ可被仰付候間、当分見合置可申事」	受付布告掛
63	庚午 9 月 15 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	受付掛
64	庚午 9 月 29 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	受付掛
65	庚午 9 月 29 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	受付掛
66	庚午 10 月 2 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通被差免候事」	—
67	庚午 10 月 3 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「半限ニ而除服出仕可被仰付候事」	—
68	庚午 10 月 3 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「乞公議」	受付掛、山口、中村
69	庚午 10 月 4 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「口書相副、刑部省へ引渡可申事」	受付掛
70	庚午 10 月 10 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
71	①(明治 3 年) 10 月 19 日 ②(明治 3 年) ③(明治 3 年) 9 月 4 日	①「寺西大録誌」 ②—(藩制案か) ③兵部省	①無地小紙 ②太政官八行罫紙 ③無地継紙(②に挟み込み)	— (口達による指令を①にメモ)	—
72	(明治 2 年) 10 月 25 日	兵部省	無地継紙	①「追而御沙汰可有之事」 ②「伺之通」 ③「大蔵省掛合之上御沙汰可有之事」 ④「追而御詮議可相成候事」	①— ②— ③— ④受付布告掛
73	庚午 10 月 28 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	受付掛
74	(明治 3 年カ) 10 月 25 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	受付掛
75	庚午 閏 10 月 28 日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	弁官印
76	庚午 閏 10 月	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙 (別冊は太政官日誌抜粋)	「伺之通」	弁官印
77	庚午 閏 10 月	兵部省→弁官	兵部省大坂出張所八行罫紙	「可為伺之通事」	弁官印
78	庚午 閏 10 月 22 日	大坂兵部省出張所→根省 (東京本省)	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	弁官印
79	庚午 12 月 4 日	兵部省→弁官	太政官八行罫紙	「御賞与之祿被召揚候事」	弁官印

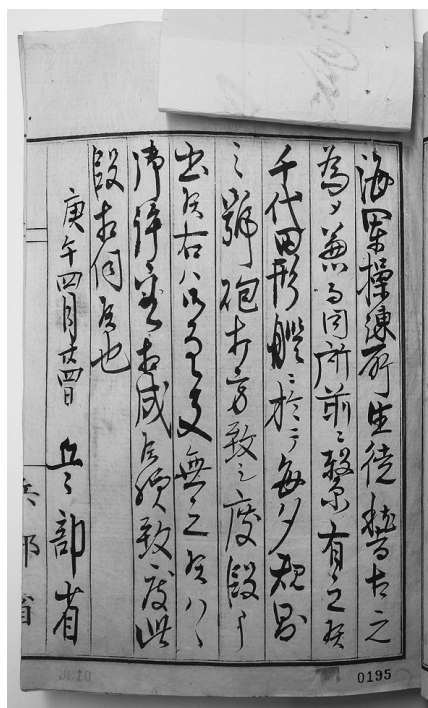
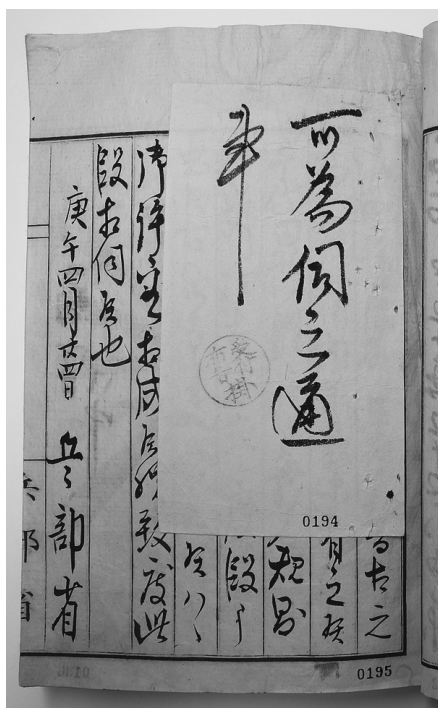
80	庚午11月4日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「不被及御沙汰候事」	弁官印
81	庚午11月	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	弁官印
82	庚午11月14日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事」	弁官印
83	—	—（「信旗・信灯」の図）	無地紙	—	—
84	庚午11月14日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「外国人御城門通行之儀、公使参朝之外都而不相成、尤別ニ用向有之通行之節ハ、其時々御沙汰ニ相成候事」	弁官印
85	庚午12月4日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	—	—
86	午4月（上の添付資料か）	→下東鎌吉・二村梶馬	兵部省八行罫紙	—	—
87	庚午12月9日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「判任以下ハ伺之通、奏任以上ハ当官ヘ可願出候事」	弁官印
88	庚午12月24日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「伺之通」	弁官印
89	庚午12月25日	弁官→兵部省	太政官八行罫紙	—	—
90	庚午12月26日	兵部省→弁官	兵部省八行罫紙	「可為伺之通事、時刻之儀ハ第八字御揃、第九字御出御之事」	弁官印

※ 作成日は漢数字を算用数字に改めた以外は史料の表記通り。（ ）内の年代は推定。表の順番は簿冊収録順。

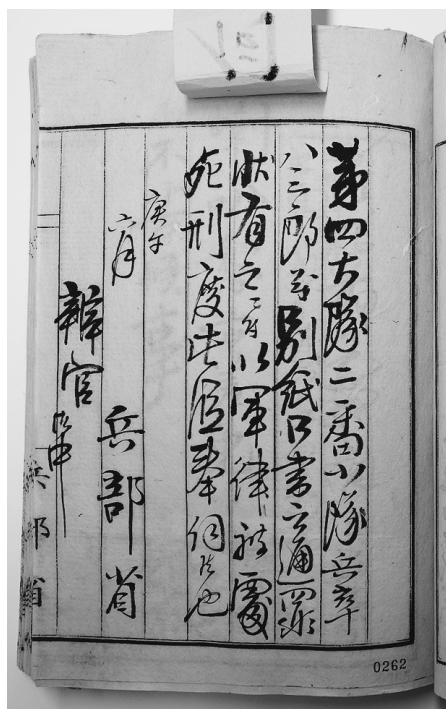
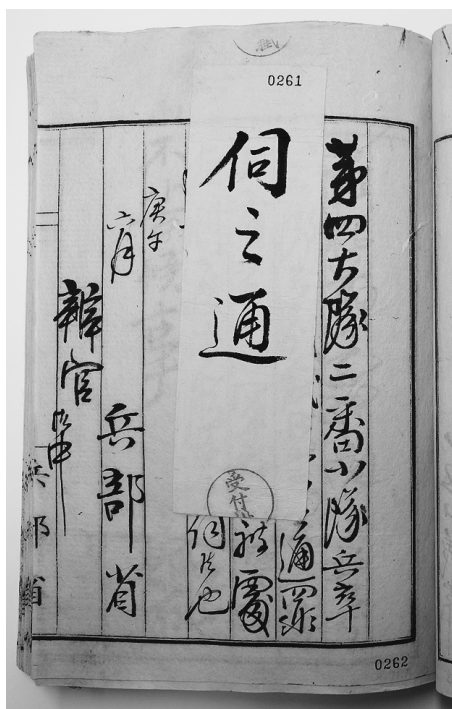
ものがほとんどである。表題通り、兵部省の上申書で太政官の「御指令済」のものをまとめた史料と考えられる。指令付札には朱印を押すのが原則であったとみられるが、印は上申書の本紙との間で割印になっているものとそうでないものがある。明治三年の簿冊の中に、月日のみが記載された明治二年の文書が混入していることから、「御指令済書類」という簿冊にまとめられたのは、一定の時間が経ってからであったと考えられる。陸軍省への移管後かもしれない。また、簿冊にまとめる際の文書上部の裁断に伴う処置か、付紙を一度剥がし、影響のない位置に貼り直している場合も多いことには注意が必要である。これらの文書の中に、「公文録」収録文書と対応するものがある。例えば、【写真2】に示した〈例1〉〈例2〉は、【写真3】に示した〈例1〉〈例2〉²¹それぞれから書き写されたものではないかと思われる。指令の文面のみや、それに加えて「付紙」という形態の説明のみが朱書されたものについては、原物が参照されたか、兵部省で別に書き留めたものから写されたか、判断がつかない。しかし、指令付札の形態が図示あるいは再現されたものについては、原物が参照された可能性が高いと言える。

この指令付札が付いた上申書は、【写真2】の〈例3〉のように陸軍省提出文書以外にも見られることから、各省使府県にその原物が残されており、「公文録」副本にはそれらをもとに作成された写しが多く含まれていることが想像される。ただし、指令付札の原物からは指令の日付が分からないのに対し、「公文録」では日付が書き込まれた指令もよく見られることから、様々な史料が合わせて参照されたと考えられる。史料⑫の「辛未七月」付で太政官から兵部省へ出された達の冒頭に、「七月五日」という日付の記載があることを見ても（【写真

【写真3】写真2に対応する「御指令済書類」（明治三年）収録文書

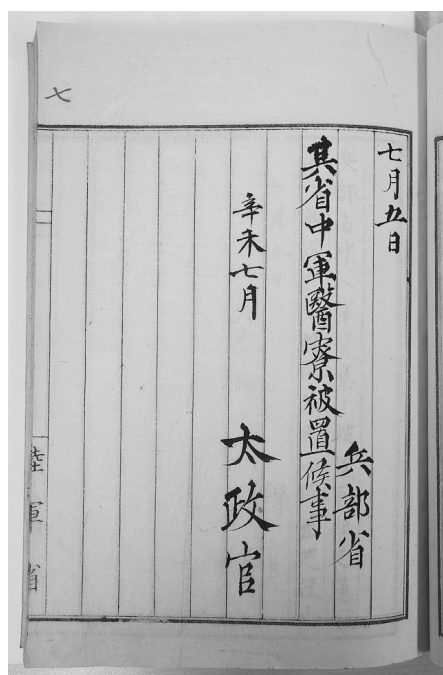


〈例1〉

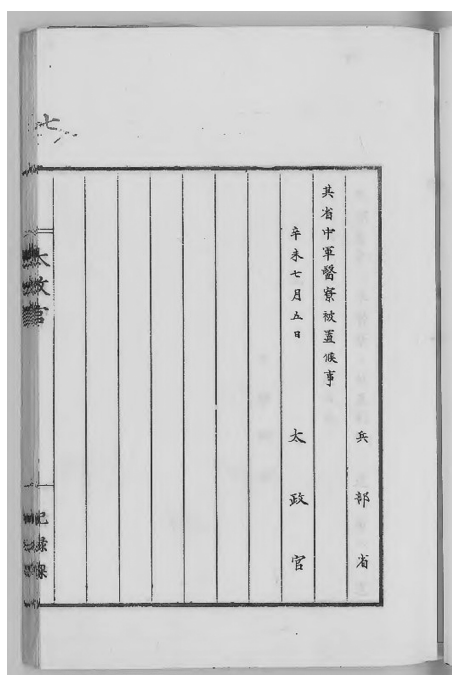


〈例2〉

【写真4】「軍医寮設立伺」⑫の副本と正本



〈副本〉



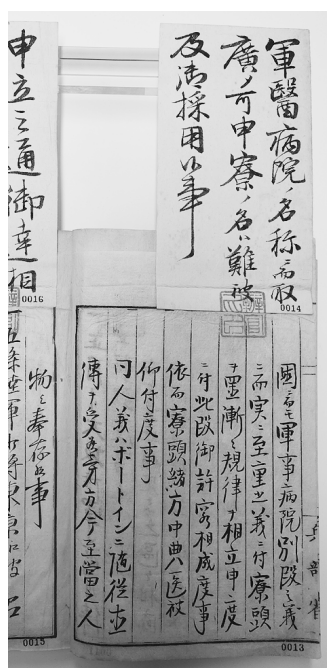
〈正本〉

4)²²、日記など省内で書き留めた記録類も重要な資料であったと考えられる。なお、この冒頭の日付の記載は、正本では達そのものの日付に書き足されてしまっており（写真4）、同様の措置は「公文録」の中でまま見られることに注意する必要がある。

【写真2】〈例3〉の「弁官之印」が史料①と同じ「弁官印」であったとすると、これまで見てきた指令付札に押された印は三種類である。この印の変遷を明治三年の「御指令済書類」（表2）から窺うと、指令日が不明であるため多少前後するものもあるが、「受付布告掛」（丸印）↓「受付掛」（丸印）↓「弁官印」（方印）と変化した様子が見て取れる。そして【表2】を見る限り、明治三年の五月頃に「受付布告掛」印から「受付掛」印へ、同年十月末から閏十月にかけての時期に、「受付掛」印から「弁官印」へと変わっている。ここで問題となるのが、同年七月十八日付の①の付紙には、定期的に「受付掛」印が押されていてしかるべきところ、実際には「弁官印」が押されていることである。①の原本は「御指令済書類」には残されていないため、関連史料を突き合わせながら事情を推測してみたい。

まず上申書の日付を疑ってみると、「七月」は「十一月」のようにも見え。ところが、①の後半部分に関わる、兵学寮教官の官名を定める兵部省宛て太政官達が、同年八月八日に出ており、①の上申書の日付は「七月」と読むのが妥当である。加えて、上申書後半部分については、太政官達の形で指令がなされた可能性がある。次に、上申の日からかなり遅れて指令が出された場合を考えると、④の庚午（明治三年）十月付の兵部省上申書の冒頭に、「過日軍医寮之儀申立候処、其節如何之次第第二有之候哉、御許容難相成段御付紙相成」と記されていることが注目される。詳細は不明であるが、軍医寮に関する兵部省

【写真5】明治四年正月十四
日の弁官宛て兵部省上申書
二ヶ条目への指令付札



の上申に対して、この時点で既に却下の指令が付紙で出されていたことが分かる。ここで「表2」を見ると、明治三年十月二十八日の兵部省上申に対する指令付札には、未だ「受付掛」の丸印が用いられている。したがって、④の作成日が十月末日（小の月であるため二十九日）であったとしても、「過日」の上申に対する指令付札に「弁官印」が押される可能性、すなわちこの指令付札が①の付札である可能性は、非常に低いと考えられる。そして、この時点で軍医寮に関しては既に却下の指令が出されている以上、その後に敢えて以前の上申書①に却下の指令を出すということも考えにくい。

そこで注目すべきは、⑦の明治四年正月二十七日の兵部省上申が、軍医寮設置願いに対する「軍医病院之名称二而取広メ可申段、御附紙御沙汰」を受けて出されている点である。この指令は何故か①に対する指令の前半と同文である。実は⑦の直前である明治四年正月十四日に兵部省が弁官に宛てた上申書が存在し、その上申書に対してこの指令が与えられていた。上申書は軍医寮の箇所を抜粋の上で「太政類典」にも収録されているが、指令付札付きの原本が明治四年の「御指

令済書類」に残されている⁽²⁵⁾。原本を見ると、本紙と別紙に分かれ、別紙に一つ書きで要求事項を並べるといふ形態や内容からして、大阪出張所の要求を東京の本省が弁官に願い出たものと推測される。六ヶ条の要求事項のうち二ヶ条目が軍医寮の設置を求めるものであり、当該箇条を抜き出すと左の通りである。

一、軍医寮御設相成度事

右者兵員増加ニ從而病院広大相成候ハ勿論之事ニ而、西洋各国ニ而モ軍事病院別段之義ニ而、実ニ至重之義ニ付、寮頭ヲ置漸々規律ヲ相立申度ニ付、此段御許容相成度事、依而寮頭緒方中典医被 仰付度事

同人義ハボートインニ随従直伝ヲ受候旁方今至当之人物与奉存候事

指令付札は箇条ごとに付されており、この二ヶ条目に対する指令がまさに、「軍医病院ノ名称二而取広メ可申、寮ノ名ハ難被及御採用候事」であった。さらに、この指令付札には「弁官印」が押されている（写真5）⁽²⁶⁾。すなわち、この指令と同じ文面・印を持つ指令付札が、①には付されているのである。

以上の検討より、「公文録」編纂の過程で、明治四年正月十四日の兵部省上申に対する指令付札を書き写した紙片が、誤って①に付けられてしまった可能性が考えられる。上申書の本紙に書き込まれた指令と異なり、指令付札には剝離や貼付間違いの危険性が付きまとうため、陸軍省で増写される際、あるいは太政官記録課で編纂される際に、上申書本紙と指令付札の対応関係が混乱したということは有り得る。そ

の一方で、編纂時の過誤ではなく決裁時の文書処理方法に起因する可能性も捨て切れない。しかし、明治政府初期の決裁過程や文書処理方法には不明な点が多く、その解明は今後の課題である。いずれにせよ、①の上申書と指令の対応関係に疑義が認められる以上、この史料は、その点を踏まえた上での利用が求められよう。

おわりに

本稿では、「軍医寮設立伺」を題材に、その他の「兵部省伺」収録文書や防衛省防衛研究所に所蔵されている兵部省時代の一次史料も参照しながら、皇城火災以前の時期の「公文録」の性格を検討してきた。あらゆる史料に当てはまることではあるが、当該期の「公文録」は特に、史料としての可能性と限界を見極めた上で利用することが望まれる史料群である。本稿がその性格を理解するための一助となることを願っている。

註

(1) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史二』（東京大学、一九八四年）、二二五頁。その他、医学史・医療衛生史の文脈において軍医寮設置を取り上げた研究として、神谷昭典『日本近代医学のあけぼの―維新政権と医学教育―』（医療図書出版社、一九七九年）第六章「兵制論争」と軍医部編成、酒井豊「兵部省軍医寮設置と大学東校」（『東京大学史紀要』五、一九八六年）、深瀬泰旦「軍医寮発足のさいにみられた東校と兵部省の確執」（『日本医史学雑誌』四一―四、一九九五年）などがある。

(2) 国立公文書館所蔵「公文録」明治四年・第二十五卷・辛未七月・兵部省伺、第七号。

(3) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第五卷（吉川弘文館、一九八五年）、大久保利謙執筆「公文録」の項目。また、「公文録」の基本的性格については、中野目徹『近代史料学の射程―明治太政官文書研究序説』（弘文堂、二〇〇〇年）第一章「公文録」と「太政類典」を参照。

(4) 中野目徹「近代太政官文書の形成過程―明治六年皇城炎上と「公文録」の編纂―」（明治維新史学会編『明治維新と史料学』吉川弘文館、二〇一〇年）。

(5) 以下は、前掲中野目「近代太政官文書の形成過程―明治六年皇城炎上と「公文録」の編纂―」に拠る。

(6) 同前、一二七頁。

(7) 「公文録」（副本）・明治四年・第二十五卷・辛未七月・兵部省伺、第七号。

(8) 緒方惟準（一八四三―一九〇九）…蘭学塾「適々斎塾」（適塾）を開いた緒方洪庵の次男として大坂に生まれる。通称は洪哉。長崎でポンペ・ボードインらに学んだ後、文久三年（一八六三）、洪庵死去により江戸に赴き、幕府の西洋医学所教授となる。元治元年（一八六四）、医学伝習の命を受けて長崎養生所に赴き、ボードインに師事した。その後オランダに留学したが、慶応四年（一八六八）に帰国、同年九月に新政府の徴士・典藥寮医師、十月に大病院取締を命ぜられた。明治二年二月、大阪病院および伝習の御用を命ぜられ、九月に宮内中典医に任命され、同三年二月十八日に軍事病院兼勤を命ぜられた。明治五年二月二十四日に

は陸軍二等軍医正に任ぜられている。中山沃『緒方惟準伝―緒方家の人々とその周辺―』（思文閣出版、二〇一二年）および国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第二卷（吉川弘文館、一九八〇年）、大塚恭男執筆「緒方惟準」の項目を参照。

(9) 写真は筆者撮影。

(10) 田口慶吉「近代太政官文書の様式について」（『北の丸』一九一九八七年）、三七―三九頁。ただし、十三行罫紙に改定されてからも、天皇への上奏用紙と太政官から各院省使等への内達書には、太政官の鳥の子十行罫紙が用いられているという。

(11) 「本省文官服制ノ儀伺」（『公文録』（副本）・明治四年・第二十三卷・辛未五月・兵部省伺、第十六号）。

(12) 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史』（一九一三年）、一四頁。凡例には典拠史料について、「本史ハ法令全書ヲ経トシ、陸軍省医務局保存ノ記録ヲ緯トシ、其ノ他陸軍達全書・日備提要等ノ文書ヲ渉猟シテ、以テ明治初年以來同四十四年十二月ニ至ル陸軍衛生制度ノ沿革ヲ叙述セルモノナリ」と記されている。

(13) 前掲酒井「兵部省軍医寮設置と大学東校」、五頁。

(14) 「石井少博士外一名大坂病院出張申立」（『公文録』明治三年・第三十三卷・庚午十月〜閏十月・兵部省伺、第六号）。

(15) 「島村少博士大坂出張申立」（同前、第七号）。

(16) 「公文録」（副本）・明治三年・第三十三卷・庚午十月〜閏十月・兵部省伺、第六号、第七号。

(17) 「千代田形艦ニテ号砲打方ノ儀伺」（『公文録』（副本）・明治三年・第二十九卷・庚午四月〜五月・兵部省伺、第十四号）所収。写真は筆者撮影。

(18) 「第四大隊二番小隊兵卒八三郎処刑伺」（『公文録』（副本）・明治三年・第三十卷・庚午六月〜七月・兵部省伺、第十四号）所収。写真は筆者撮影。

(19) 「諸御門無鑑札者通行差留ノ儀伺」（『公文録』（副本）・明治四年・第十九卷・辛未一月・兵部省伺、第二十二号）所収。写真は筆者撮影。

(20) 「明治3年 御指令済書類」（防衛省防衛研究所所蔵、兵部省雑M33-2）、「明治4年 御指令済書類」（同所所蔵、兵部省雑M4C-10）。

(21) 「明治3年 御指令済書類」、〇一九四―〇一九五（例1）、〇二六一―〇二六二（例2）。写真は、防衛研究所戦史研究センター所蔵の原本を筆者が撮影したもの。なお、当該箇所の画像は、JACAR（アジア歴史資料センター）RefC10070798400（例1）、C1007080300（例2）にも公開されている。

(22) 副本の写真は筆者が撮影したもの、正本の写真は国立公文書館デジタルアーカイブで公開されている画像の一部である。

(23) 「公文録」明治三年・第三十二卷・庚午九月・兵部省伺、第十一号。副本も参照。

(24) 「兵部省軍医寮ヲ設置セン事ヲ請フ之ヲ允サス病院ノ名ヲ以テ事務ヲ拡張セシム」（国立公文書館所蔵「太政類典」第一編・慶応三年〜明治四年・第百六卷・兵制・陸海運官制、第七十九号）。

(25) 「明治4年 御指令済書類」JACAR:C10070868000 C10070868100。

(26) 写真は、防衛研究所戦史研究センター所蔵の「明治4年 御指令済書類」の原本を、筆者が撮影したものである。

〔付記〕 本研究はJSPS科研費〔14〕10237の助成を受けたものである。